

半七捕物帳

小女郎狐

岡本綺堂

青空文庫

なにかのことから大岡政談の話が出たときに、半七老人は云った。

「江戸時代には定まった刑法がなかったように考えている人もあるようですが、それは間違いですよ。いくら其の時代だからといって、芝居や講釈でする大岡捌きのように、なんでも裁判官の手心てしころひとつで決められてしまつちやあ堪まりません。勿論、多少は係りの奉行の手心もありますけれども、奉行所には一定の目安書めやすがきというものがあつて、すべてそれに拠つて裁判を下したもので、奉行の料簡で殺すべきものを生かすなんて自分勝手くだのことは、なかなか出来ないような仕組みになつていたんです。それは昔も今も同じことです。しかしその目安書というのが今日の刑法などに比べると余ほど大づかみに出来ていますから、なにか毛色の変つた不思議な事件がしゅつたい出しゅつ来たいすると、目安書だけでは見当が付かなくなつて、どんな捌きを下していいのか、係りの役人どもはみんな頭を痛めてしまうんです。そこらが名奉行とぼんくらのわか岐わかれるところで、大岡越前守や根岸肥前守はそういう難問題をうまく切り捌いたのでしよう。江戸の町奉行所さえその通りですから、まして

諸国の代官所……それは諸国にある徳川の領地、俗に天領というところを支配しているの
で、その土地の出来事は皆この代官所で裁判することになっていたんです。……そこでは、
とてもむずかしい捌きなどは出来ないし、又うっかりした捌き方をして、後日ごにちに譴責けんせきを
うけるようなことがあっても困るので、少し手にあまるような事件には自分の意見書を添
えて『何々の仕置可申付哉、御伺』といって、江戸の方までわざわざ問い合わせる。

それに対して、江戸の奉行所から返事をやるのを『御指図書』おさしずがきといいます。つまり先方の
意見に対して、その通りとか、再吟味とか、あるいは奉行所の意見を書き加えてやるとか
するので、それに因って初めて代官所の裁判が落らく着ちやくするんです。死罪のような重い仕
置は勿論のこと、多寡が追放か棒ぼう敲たたきぐらいの軽い仕置でも、その事件の性質に因って
は江戸まで一々伺いを立てたもので、くどくも云う通り、いくらその時代だからといって、
人間ひとりに裁判を下すということは決して容易に決められるものではなかったのです。

いや、飛んだ前置が長くなりましたが、その代官所からわざわざ伺いを立てて来るほど
のものは、いずれも何か毛色の少し変った事件ですから、江戸の奉行所でも後日の参考の
ために『御仕置例書』おしおきれいがきという帳面に書き留めて置くことになっていました。勿論、これ
は係りのほかに他見を許されないことになっているんですが、わたくしを鼠臈ひいきにしてくれ

る吟味与力から貸して貰って、ちよつと珍しいと思うのだけを少し書きぬいて置きました。そうそう、そのなかに小女郎狐という変つた事件がありましたから、お話し申しませう。この事件は『御仕置例書』の日付けによると寛延元年九月とありますから、今からざつと百七十年前、かの忠臣蔵の浄瑠璃が初めて世に出た年のことですから、ずいぶん遠い昔のことですよ」

「御仕置例書」にはいずれも国名と村名とを記してあるだけで、今日のように郡名を記してないので、ちよつと調べるのに面倒であるばかりでなく、その当時とは村の名の変つているのもあるので、その方角を見定めるのはいよいよ困難であるが、ともかくも「御仕置例書」には下総しもうさぎのくに国新石下しんいししたむら村とある。寛延元年九月十三日夜いの刻午後十時から夜明けまでのあいだに、五人の若い男が即死、二人が半死半生という事件がしゅつたい出たので、村中は大騒ぎになつた。

場所は庄屋茂右衛門が持ちの猪番ししばん小屋で、そこには下男の七助というのが住んでいた。猪番小屋といえど何処でも小さい狭いものであるが、これはともかくも人の住めるだけに出来ていたらしく、番人の七助は夜も昼もそこを自分の家にして、昼は野良のらかせぎの手

伝いに日を暮らし、夜はそこで猪の番をしていた。七助はまだ十九の若い者であるので、村の若い者たちはそこをいい遊び場所にして、毎晩のように寄りあつまって馬鹿話に夜をふかすばかりか、悪い手慰みなどもするという噂であったが、主人の茂右衛門は別に咎めもしないで捨てて置いた。

事件の起つた晩にあつまつたのは、佐兵衛、次郎兵衛、弥五郎、六右衛門、甚太郎、権十の六人で、今夜は後の月見のちというので、何処からか酒や下物さかなを持ち込んで来て、宵から飲んで騒いでいた。

「猪番なんぞはどうでもいい。猪の奴め、この騒ぎにおつ魂消たまげて滅多に出て来るもんじゃあねえ」

こんなことを云つて、番人の七助をはじめ、六人の者もさんざんにしゃべつて、騒いで、いい心持に酔い倒れてしまった。畑中の一軒家ではあるが、かれらの笑い騒ぐ声が亥の刻頃まで遠くきこえたのを村の者は知っていた。しかしその夜が明けても猪番小屋の戸は明かなかつた。いつも早起きの七助が今朝は起きて来ないのを怪しんで、庄屋の家の者が見まわりに来ると、表の戸は閉め切つてあつて、戸の隙き間から眼にしみるような煙りが流れ出していた。いよいよおかしく思つて戸をあけると、狭い小屋の中から薄黒い煙りが一

度にどつと噴き出して来て、一時は眼口めくちもあけられない程であつた。もともと狭い小屋のなかに、大の男が七人も重なり合つて倒れているのであるから、殆ど足の踏みどころもない。それを一々呼び起すと、かすかに返事したのは甚太郎と権十の二人だけで、番人の七助と佐兵衛、次郎兵衛、弥五郎、六右衛門の五人はもう息が絶えていた。ほかの二人も半死半生であつた。

小屋主ぬしの茂右衛門は勿論、村じゅうの者が駈けつけていろいろ介抱したが、どうにかこうにか正氣づいたのは、やはり甚太郎と権十の二人だけで、ほかの五人はどうしても生きなかつた。生き返つた二人の話によると、かれらは正体もなく酔い倒れてしまったので、何事も知らない。夢うつつのように何だかむやみに息苦しくなつたと思ひながらも、身動きすることも出来なかつたというのである。始めは何か食い物の毒あたりではないかという説もあつたが、だんだん調べてみると、炉のなかには松葉を焚いたらしい灰がうず高く積つている。焼け残つた青い松葉もそこらに散つている。かれらは夜寒よさむを凌ぐために焚き火をして、その煙りに窒息したのではないかともおもわれたが、ふたりは松葉などを燃やした覚えはないと云い張つていた。夜がふけて雨戸をしめたのは知つているが、炉のなかに木の葉など炙くべたことはない、第一この小屋のなかには青い松葉などを積み込んである

のを見たことがないと云った。

しかしこここの炉に松葉をくべた証拠はありありと残っている。しかもおびただしい松葉を積みくべたのは、そのうず高い灰を見ても知られた。更に調べてみると、松葉ばかりでなく、あおとうがらし青唐辛をいぶした形跡もある。七人の男が正体もなく寝入っている隙をうかがって、何者かがこの小屋に忍び込んで、青松葉や青唐辛のたぐいを炉に積みくべて彼等をいぶし責めに責め殺したのであろう。狐つきの病人から狐を追い出そうとして、病人をむごたらしい松葉いぶしにして、とうとうそれを責め殺してしまったというような話は、江戸にも田舎にもときどきに伝えられるが、これは単に酔い倒れている男七人を松葉いぶしにしたのである。あまりの怖ろしさに人々も顔を見あわせた。

場所が猪番の小屋であるから、それが盗みの目的でないことは判り切っていた。さりとて七人が七人、揃って人の恨みを受けそうもない。勿論、そのなかには何の罪もなく傍そばづ杖えの災難をうけた者もあるかも知れないと、庄屋の茂右衛門が先に立っていろいろに詮議をしたが、差しあたり是れという心あたりも見いだされなかつた。そのうちに誰が云い出すともなく、それは狐の仕業しわざであるという噂が伝えられた。

昔からこの土地には、小女郎狐というのが棲んでいて、いろいろの不思議をみせると云

い伝えられている。ある時には美しい女に化けて往来の人をたぶらかすこともある。美少年にも化ける、大入道にも化ける。あるときには立派な大名行列を見せる。源平屋島の合戦をみせる。こういう神通力をもっている狐であるから、土地の者も「小女郎さん」と畏れうやまつて、決して彼女に対して危害を加えようとする者もなかった。ところが、今から五、六日ほど前に、この畑で猪を捕るために掘つてある陥穽おとしあなのなかに小さい狐が一匹落ちて迷つているのを発見して、番人の七助とあたかもそこに来あわせた佐兵衛、次郎兵衛、弥五郎、六右衛門との五人がすぐにその狐の児を生け捕つて、いたずら半分に松葉いぶしにして責め殺したことがある。おそらく彼のか小女郎狐の眷族けんぞくであつて、その復讐のために彼等もまた松葉いぶしのむごたらしい死を遂げたのであろう。その証拠には直接に手をくだした五人は命をとられて、無関係の二人は幸いに助かつた。それらの事情から考えると、どうしてもこれは人間の仕業でなく、たしかに狐の祟りたたに相違ないという説がだんだん有力になつて来た。

役人の検視も一応済んで、五人の死骸は村の高巖寺に葬られた。ここらの葬式は夜であつたが、その宵に無数の狐火が寺のうしろの丘の上に乱れて飛んでいるのを見た者があつた。

二

「どうも朝夕はめつきり冷たくなりました」

八州廻りの目あかしの中でも古狸の名を取っている常陸屋ひたちの長次郎が代官屋敷の門をくぐって、代官の手附てつきの宮坂市五郎に逢った。長次郎はその頃もう六十に近い男で、絵にかいた高僧のように白い眉を長く伸ばしていた。

「やあ、常陸屋か。だんだんと日が詰まって来るな」と、市五郎は玄関に近い小座敷で彼と向い合った。

「なにかとお忙がしいでございましょうね」と、長次郎は会釈えしゃくして筒提げの煙草入れを取り出した。「早速でございしますが、何か新石下の方に御検視があつたそうで……。わたくしは親類に不幸がございまして、きのうまで土地を留守にして居りましたもんですから、一向に様子が判りませんのでございしますが……」

「検視は八州の方で取り扱つたので、わたしもよくは知らないが、その顛末てんまつだけは詳しく知っている。新石下の百姓どもが五人死んで、ふたりは生き返つた」

松葉いぶしの一件を市五郎からくわしく説明されて、長次郎は顔をしかめた。かれは煙草を一服吸ってしまつて、しずかに云い出した。

「なんだか妙なお話ですね。小女郎狐ということとはわたくしも前から聞いては居りますが、その狐がかたき討に五人の男を殺すなんて、今の世の中にやあちつと受け取れませんね。それこそ眉毛に唾つばですよ。あなたのお考えはいかがです」

「わたしにも別に考えはない」と、市五郎は困つたような顔をしていた。「ほかに詮議のしようもないらしいので、まずそれに決めてしまつたのだが、煙けむにむせて死んだには相違ない。狐の祟りはどうだか知らないが、松葉いぶしはほんとうだ。生き残つた二人はそんな覚えがないというけれども、自分たちが火を焚いたのを忘れているのだろう。なにしろ正体もないほどに酔つていたというからしようがあるまい」

「下手げしゅにん人はあるじゃありませんか」と、長次郎は笑つた。「小女郎狐という立派な下手人があるんでしよう」

市五郎は苦笑にがわらいをしていた。

「ねえ、宮坂さん」と、長次郎はひと膝すすめた。「及ばずながらわたくしがその小女郎狐を探索しようじゃございませんか。狐はきつとどつかにいますよ」

「むむ。こつちが古狸で、相手が狐、一つ穴だからな」

「洒落しやれちやあいけません。真剣ですよ。ともかくも古狸の狐狩というところで、常陸屋の働きをお目につけようじやありませんか。いづれ又伺いますが、御代官様にもよろしくお願い申します」

市五郎に別れて出て、長次郎はその足で高巖寺へゆくと、そこらに群がって飛ぶ赤とんぼの羽がうらかな秋の日に光つて、門の中にはゆうべの風に吹きよせられたいろいろの落葉が、玄関に通う石いしたみ盤たみを一面にうずめていた。庫裏くりをのぞくと、寺男の銀蔵おやじが薄暗い土間で枯れ枝をたばねていた。

「おい、忙がしいかね」と、長次郎は声をかけた。「焚き物はたくさん仕込んで置くがい。もう直つくき筑波はが吹きおろして来るからね」

「やあ、お早うございます」と、銀蔵は手拭の鉢巻を取って会釈した。「まったく朝晩は急に冬らしくなりましたよ。なにしろ十三夜を過ぎちやあ遣り切れねえ。今朝なんぞはもう薄霜がおりたらしいからね」

「十三夜といやあ、あの晩にやあ飛んだことがあったそうだね。私もたった今、御代官所の宮坂さんから詳しいことを聞いて来たんだが、働き盛りの若けえのが五人も一度にいぶ

されちやあ堪まらねえ。刈り入れを眼のまえにひかえて、どこでも困るだろう。五人の墓はみんなこの寺内にあるんだね」

「そうですよ。先祖代々の墓がみんなこの寺内にあるんだからね。ところが、どうも困ったことが出来てね」

「なんだ。何が困るんだ」と、長次郎はそこに束ねてある枯れ枝の上に腰をおろした。

「小女郎がやつぱり悪戯いたずらをするらしい。毎晩のようにやって来て、五人の墓の前に立っている新しい塔婆を片っぱしから引っこ抜いてしまふんですよ。花筒しきみの櫛しきみの葉は搔きむしってしまう。どうにも手にも手にも負えねえ。初七日しよなのかを過ぎてまだ間もねえことだし、親類の人達だつて誰が参詣に来ねえとも限らねえから、あまりこう散らかして置いてもよくねえと思つて、毎朝わしが綺麗に直して置くと、毎晩根こんよく搔かつ散らして行く。こつちも根負けがしてしまつて、きのうも佐兵衛どんの兄貴が来た時にその訳をよく話して、もうそのままに打つちやつて置くつもりですよ。けさはまだ行つて見ねえが、きつとやつてゐるに相違ねえ。小女郎もあんまり執念ぶけえ。五人の命まで奪つたら、もういい加減に堪忍してやればいいのに……。生いきりよう靈りようや死靈とは違つて、あの小女郎ばかりは和尚様の回向えこうでも供養でも追つ付かねえ。ほんとうに困つたもんですよ」

「村の者はみんな小女郎の仕業と決めているんだね」

「まあ、そうですね」と、銀蔵は手拭で涙をこすりながらうなずいた。「なにしろ子狐を責め殺したのが悪かつたんですよ。死んだ者の親戚の人達もまあ仕方がねえと諦めていたんだが、その中でたった一人、今も云った佐兵衛どんの兄貴の善吉、あの男だけはまだそれを疑って、どうも狐の仕業じゃあるめえと云い張っているんだが、ほかにはなんにも証拠も手がかりもねえことだから、どうにもしようがねえ。どう考えても狐の仕業と決めてしまふよりほかはありますめえよ」

「そうさ。それにしても執念ぶかく墓をあらすのは良くねえな。なにしろ、その新ぼとけの墓というのを拝ましてくれねえか」

銀蔵に案内させて、長次郎は墓場の方へ行ってみると、かなり広い墓場の入口に先ず六右衛門の墓場を見いだした。墓の前には新しい卒堵婆そとばが立っていた。櫛の花筒がすこし傾いているのは昨夜の風の為であるらしく、何者にか掻き散らされた形跡も見えなかった。銀蔵は怪訝けげんな顔をして眼を見はった。

「はてね。けさは何ともなっていねえぞ」

彼はあわてて石塔のあいだを駆けまわって、更に次郎兵衛の墓の前に出ると、ここにも

卒堵婆や花筒が行儀よく立っていた。それから順々に見てまわると、ほかの三人の墓の前にも今朝はなんの異状もなかった。

「こりやあ、不思議だ。もう十日にもなるから、小女郎も堪忍してくれたかな」と、銀蔵はほっとしたように云った。

「きのうの朝はみんな倒してあったんだね」

「塔婆も花筒もみんな打つ倒してあったのを、わしが一々立て直したんですよ」

「むむ」と、長次郎は新しい卒堵婆の一本に手をかけて、明るい日のひかりに透かして視た。かれは更に自分の足もとを見まわしながら云った。「お前、以前はずいぶん綺麗好きだったが、だんだんに年を取ったせいか、この頃はあんまり掃除が届かねえようだね。きのうここらを掃かねえのかね」

「きのうは葬式で、茶を沸かすやら、火を起すやら、わし一人でなかなかこちらの掃除までは手が廻らなかつたからねえ」と、銀蔵は笑っていた。

長次郎は落葉を踏みわけて、五人の墓の卒堵婆を一々見てあるいた。中にはそれを引きぬいて、打ち返してじつと眺めているのもあった。かれは草履の爪さきでうず高い落葉を蹴散らしながら、墓のまわりの湿った土の上をいつまでも見廻した。それが済んで引返

そうとする時に、かれは隅の方に立っている小さい墓にふと眼をつけた。その前に立っている卒堵婆もあまり古いものではないらしく、花筒には野菊の新らしい花がたくさん生けてあった。長次郎は銀蔵を見かえって訊いた。

「あれはどこの墓だね」

「あれかね」と、銀蔵は伸び上がりながら指さした。「あれはおこよ坊の墓ですよ」

「花がたくさん供えてあるじゃねえか。おこよというのは、このあいだ身を投げた娘だろう。違うかね」

「そうですよ。可哀そうなことをしましたよ」

ふたりの足はおのずとその墓の前に立った。

「おこよの死んだのはいつだっけね」

「先月……ちようど十五夜の晩でしたよ」

「十五夜か」と、長次郎はすこし考えていた。「一体あの娘は^こどうして死んだんだ。いい娘だったという噂だが……」

「川のふちへ^{すすき}芒を取りに行つて滑り込んだというんだがね。世間じゃいろいろのことを云いふらす者もあつて、何がなんだか判らねえ」

「どんなことを云い触らすんだね」

云いながら長次郎は身をかがめて、又もやその墓のまわりを身廻していた。

「仏に疵をつけるのはいけねえことだ」と、銀蔵は溜息をついた。「まして若けえ娘つ子に……。あんまり可哀そうで滅多なことは云われねえ」

かれは固く口をつぐんで、その以上のことは何にも云わなかった。長次郎は無理に訊き出そうともしなかった。銀蔵おやじの強情なことをよく知っている彼は、ここで無益の詮議をするよりも、おこよの死についてはほかに幾らも探索の道があると思つたので、そのままに聞き流してこの寺を出た。

三

「おや、親分さん。いらつしやいませ」

茶店の女房は愛想あいそよく長次郎を迎えた。茶店といつても、この村はずれに荒物屋と駄菓駄菓子屋とを兼ねている小さい休み茶屋で、店の狭い土間には古びた床几が一脚すえてあつた。女房がすぐに持ち出して来た煙草盆と駄菓子の盆とを前に置いて、長次郎は温ぬるい番茶を一

杯のんだ。店の前には大きい櫃えのきが目じるしのように突つ立って、おあつらえ向きの日よけになつていた。時候の挨拶や、この出来秋できあきの噂などが済んで、長次郎はやがてこんなことを云い出した。

「ねえ、おかみさん。御用でおれは時々こつちへも廻つて来るが、もともとこの村の落穂を拾つている雀でねえから、土地の様子はあんまりよく知らねえ。なんでも先月の十五夜の晩に、おこよといういい娘こが川へ陥はまつて死んだというじゃあねえか」

「ほんとうにあの娘は可哀そうなことをしましたよ」と、女房は俄かに眼をしばたいた。

「村では評判の容貌さうぼう好しで、おとなしい孝行者でしたが、十五夜の晩すすきに芒を取りに出たばつかりに、あんなことになつてしまつて……」

「十五夜は朝から判り切つているのに、日が暮れてから芒を取りに出るといふこともねえじゃあねえか」と、長次郎はあざわらうように云つた。「あの娘は幾つだったね」

「十九の厄年です」

「十九といえども子供じゃあねえ。お月さまの顔を拝んでから芒を取りに行くほどどうつかりしてもいねえ筈だ。親孝行でも、おとなしくても、十九といえれば娘盛りだ。おまけに評判の容貌好しというんだから、傍はたが打つちやつて置かねえだろう。あの娘が死んだのは、

なんでもほかに訳があるんだと世間じやあ専ら噂しているが、おかみさんは知らねえのかね」

「親分さんもそんな事をお聞き込みでしたか」と、女房は相手の顔をじつと見つめた。

「世間の口に戸は閉てられねえ。粗相で死んだのか、身を投げたのか、自然に人が知っているのさ。高巖寺でもそんなことを云つていたっけ」

「高巖寺で……。和尚様ですか、銀蔵さんですか」

「まあ、誰でもいい」と、長次郎はやはり笑っていた。「ねえ、おかみさんも知っているんだろう」

相手が御用聞きである上に、高巖寺から大抵のことを聞き出して来たらしいので、女房もうっかり釣り込まれて、訳も無しに長次郎の問いに落ちた。その話によると、おこよの死は不思議なことがその原因をなしているのであった。

おこよは四十を越えた盲目の母とふたりで貧しく暮らしている娘であった。水呑み百姓の父はとうに世を去つて、今年十四になる妹娘のお竹は、四里ばかり距れたところに奉公に出ている。おこよは孝行者で、昼間は庄屋の茂右衛門の家へ台所働きに行つて、夜は自分の家に帰つて近所の人の賃仕事などをして、どうにか斯うにか片輪者の母を養っていた

が、かれが容貌がいいのはここらでも評判であつた。したがつて、村の若い者どもから度々なぶられたり袖を曳かれたりしたこともあつたが、おとなしい彼女は振り向いても見なかつた。

そのうちに、かれの身の上に思いもよらない幸運が向いて来た。かれの孝行と容貌好しとが隣り村にもきこえたので、相当の家柄の百姓の家から嫁に貰いたいという相談を運んで来て、母も一緒に引き取つて不自由させまいというのであつた。その媒人なこうどはかの高巖寺の住職で、話はもう半分以上まで進行したときに、今度は思いもよらない不運がかれの上に落ちかかつて来た。それは実に飛んでもない話で、かれは彼のか小女郎狐と親しくしているという噂であつた。

おこよは用の都合で暮れてから庄屋の家を出ることもあつた。その帰り途で、彼女はここらにめずらしい寺小姓風の美少年に出逢つて、暗い鎮守の森の奥や、ひと目のない麦畑のなかへ一緒に連れ立つて行ったことがある。その美少年は小女郎狐か、もしくはその眷族の化身けしんで、かれは畜類とまじわつているのであるという奇怪の噂はだんだんに広まって来た。それが隣り村にもきこえたので、縁談は中途で行き悩みになった。さりとは途方もないことであると、高巖寺の住職はおどろいて怒つて、その噂の主ぬしをしきりに詮議したが、

確かにそれと取り留めたこともないうちに、折角の縁談はどうとう毀れてしまった。それから三日目の十五夜の晩に、おこよの死体は村ざかいの川しもに見いだされた。

若い美しい娘の死については何かの秘密がまつわつているのであるとは、長次郎も最初から大抵想像していたが、かれの運命もまた小女郎狐のろに呪われていようとはさすがに思いも寄らなかつた。

「なるほど飛んでもねえ話だ」と、長次郎も溜息をついた。「しかし隣り村の家というのもあんまり過はやまつているじゃねえか。ほかの事と違つて、嘘かほんとうかよく詮議して見たらよかろうに、それですぐに破談にしてしまうというのは可哀そうだ。それがために容貌よしの孝行娘を殺してしまつたんだね」

「ほんとうにむごたらしいことをしましたよ」と女房も鼻をつまらせた。「つまりあの娘の不運なんですよ。狐のことは嘘かほんとうか判りません。なにをいうにも相手が小女郎さんですから、どんなことをしないと限りませんけれど……」

いずれにしても、おこよの死は悼いたましいものであつたと、女房はかれの不幸にひどく同情していた。そして、更にこんなことを付け加えて話した。おこよを嫁に貰おうとしたのは、となり村の平左衛門という百姓の家で、かれの夫となるべき平太郎という伴は小女郎

狐の噂を絶対に否認して、是非ともおこよを自分の妻にしたいと云い張ったが、父の平左衛門は首をかしげた。むかし気質かたぎの親類どもからも故障が出た。たといそれが嘘であろうとも、ほんとうであろうとも、仮りにもそんな忌わしい噂いまを立てられた女を迂濶うかつに引き入れるということは世間の手前もある。ひいては家名にも疵がつく。嫁はあの女に限ったことではない。そういう多数の議論に押し伏せられて、平太郎はよんどころなしに諦めてしまったが、内心はなかなか諦め切れないところへ、おこよの水死の噂が伝わったので、それは芒を取りに行つた為のあやまちではない、その死因はたしかに縁組の破談にあると彼は一途いちずに認定した。その以来、彼はなんだか物狂わしいような有様となつて、ときどきには取り留めもないことを口走るので、家内の者も心配している。現に二、三日まえにも鎌を持ち出して、これから小女郎狐を退治にゆくと狂いまわるのを、大勢がようように抱き止めたというのであつた。

「そうかえ」と、長次郎はまた溜息をついた。「そりやあ困つたものだ。かさねがさねの災難だね」

「やつぱり小女郎さんが祟っているのかも知れませんが」と、女房は怖ろしそうにささやいた。「そればかりじゃありません。親分も御承知でしょうが、お庄屋さんの猪番小屋で五

人も一緒に死ぬという、あれも唯事じやありませんまい」

云うときに店の前に餌を拾っている雀がおどろいたようにぱつと起ったので、長次郎はふとそつちに眼をやると、大きい榎のかけから一人の男が忍ぶように出て行った。長次郎はそのうしろ影を頤あごで指しながら小声で女房に訊いた。

「あの男は誰だえ。村の者だろう」

「善吉さんのようです」と、女房は伸びあがりながら云った。「このあいだ、猪番小屋で死んだ佐兵衛さんの兄さんですよ」

「むむ、そうか」

長次郎はうなずきながらそつと店の先に出て、再び彼のうしろ姿を見送ると、善吉はなにか思案に耽たづつているらしく、俯向き勝ちにぼんやりと歩いて行った。うしろ姿から想像すると、かれはまだ二十四五の若い者であるらしかった。寺男の銀蔵おやじの話によると、かれは弟の横死を狐の仕業と信じていないという。——その話を長次郎は今更のように思い出した。

「おかみさん。どうもいつまでもおしやべりしてしまった。だが、まあ気をつけねえ。お前のような年増盛りは、いつ小女郎に魅みこまれるかも知れねえ」

「ほほ、忌でございますよ。毎度ありがとうございました」

茶代を置いて、長次郎はそこを出た。この村にはほかに知っている家もないので、彼はもう一度代官の屋敷へ引返して、宮坂のところまで午飯を食わせて貰って、それから遠くもない隣り村へ出かけて行つた。平左衛門の家の近所へ行つて、よそながら平太郎の噂を聞くと、彼がこのごろ少し物狂わしくなつたのは事実で、この月初めから二、三度も家を飛び出したことがある。世間の聞えをはばかりて親達はそれを秘密にしているが、自分の妻にと思ひ込んだ女が突然に悲惨の死を遂げると同時に、かれも取り乱して本性を失つたのは、近所でもみな知つてゐることであつた。平太郎は今年二十歳で、ふだんがおとなしい男であるだけに、一時に赫と取り詰めたのであろうという者もあつたが、大体に於いてはやはり彼の小女郎の仕業という説が勝を占めていた。小女郎さんが魅こんでゐる女を横取りして自分の女房にしようとしたので、その祟りで女は執り殺された。平太郎にも狐が乗り憑つて、あんな乱心の体たらくになつたのであると、顔をしかめてささやくものが多かつた。

乱心して時々家を飛び出す男——すでに乱心している以上は何事と仕出かすか判らない。長次郎は更に平左衛門の家の作男をそつと呼び出して、主人の伴はこの十三夜の

夜ふけに寢床をぬけ出して村境の川縁かわべりにさまよっていたのを、ようように見つけ出して連れ戻ったという事実を新らしく聞き出した。その家は成程ここらでも相当の旧家であるらしく、古い門の内には広い空地あきちがあつて、大きい柿の実の一面に色づいているのも何となく富裕にみえた。作男と話しながら、長次郎はときどき門の内を覗いていると、ひとりの若い男が何処からか不意にあらわれた。かれは跳りあがつて長次郎の眼の前に突つ立つた。

「さあ、一緒に来い。小女郎めを退治に行くから」

それが平太郎であることを長次郎はすぐに覺つた。彼はつづいて叫んだ。

「小女郎ばかりでねえ。佐兵衛も六右衛門もみな殺してやる。あいつらは狐の廻し者だ。あと方もねえことを触れて歩きやあがつて、おれの女房を狐の餌食えしきにしてしまやがつた」
長次郎は笑いながら彼の蒼ざめた顔をじつと眺めていた。

四

その晩、新石下の村でまた一つの事件が起つた。かの善吉の妹のお徳が兄の寢酒を買い

に出た帰り途に、田圃路たんぼみちで何者にか傷つけられた。善吉と佐兵衛とお徳とは三人の兄きょう妹まいで、かれはまだ十五の小娘であった。近ごろ中の兄なかを失って心さびしい彼女は、宵闇の田圃路を急ぎ足にたどって来ると、暗いなかから何者かが獣のように飛び出して来て、だしぬけに彼女の顔を搔きむしったので、お徳はきやつと悲鳴をあげて、手に持っていた徳利を捨てて逃げ出した。ようように家へころげ込んで母や兄に見て貰うと、かれは頬や頸筋をめちゃくちやに引つ搔かれて、その爪あとには、生血なまぢがにじみ出していた。

「狐の仕業しわざだ。佐兵衛を殺したばかりでは気が済まねえで、今度は妹に祟つたのに相違ちがねえ」

こんな噂が又すぐに村じゆうにひろがった。これも寝酒を買いに出た高巖寺の銀蔵は、途中でその噂を聞いて急に薄気味悪くなつて、どうしようかと路ばたに突つ立って思案している、不意にその肩を叩く者があつた。ぎよつとして透かしてみると、頬かむりをした長次郎が暗い蔭に忍んでいた。

「おお、親分。お聞きでしたか、小女郎がまた何か悪さをしたそうで……」

「そんな話だ」と、長次郎はうなずいた。「ときにお前に無心がある。今夜はお前のところへ一と晩泊めてくれねえか」

耳に口を寄せてささやくと、銀蔵も幾たびかうなずいた。

「わかりました、判りました。さあ、すぐにお出でなせえ」

「お前、どつかへ行くんじやあねえか」

「寢酒を一合買いに行こうと思つたんだが、まあ止しだ^よ」

「酒はおれが買う。遠慮なく行つて来ねえ」

「だが、まあ止そうよ」

「じいさんも狐が怖いか」と、長次郎は笑つた。

「あんまり心持がよくねえ。おまけに今夜は闇だから」

銀蔵は長次郎と一緒に引つ返した。庫裏くりに隣つた彼の狭い部屋に案内されて、長次郎は炉の前でしばらく世間話などをしていたが、やがて四ツ（午後十時）に近いころに、彼は再び手拭に顔をつつんで暗い墓場の奥へ忍んで行つた。宵闇空には細かな糠ぬかほし星が一面にかがやいて、そこらの草には夜露が深くおりていた。大きい石塔のかげに這いかがんで、長次郎はしずかに夜のふけるのを待っていると、そよりとも風の吹かない夜ではあつたが、秋ももう半ばに近いこの頃の夜寒が身にしみて、鳴き弱つたの聲が悲しくきこえた。

半時あまりも息を殺していると、うしろの小さい丘を越えて、湿しめつた落葉を踏んで来る

ような足音がかきこそと微妙かにひびいた。長次郎は耳を地につけて聞き澄ましていると、その小さい足音はだんだんにこちらへ近づいて、墓場の垣根をくぐって来るらしかった。垣根はほんの型ばかりに粗く結つてあるので、誰でも自由にくぐり込むことを長次郎は知っていた。星のひかりに透かしてみると、黒い小さい影は犬のように垣根をくぐって、一つの石塔の前に近寄つたかと思うと、その石塔の暗いかげからも又ひとつの黒い大きい影が突然あらわれた。

大きい影は飛びかかつて、小さい影を捻じ伏せようとするらしかった。小さい影は振り放そうと争っているらしく、二つの影は無言で暗いなかに纏れ合っていた。やがて小さい影が組み伏せられたらしいのを見たときに、長次郎も自分の隠れ家から飛び出して、まずその大きい影を捕えようとする、彼はそこにある卒堵婆を引きぬいて滅多なぐりに打ち払った。その隙をうかがって小さい影は掻いくぐって逃げようとしたが、大きい影はその掴んだ手を容易にゆるめなかつた。長次郎に卒堵婆を叩き落されて、大きい影がそこに引き据えられると同時に、小さい影も一緒に倒れた。袂から呼子の笛を探り出して、長次郎がふた声三声ふき立てると、それを合図に銀蔵が枯枝の大松明をふり照らして駆け付けた。

松明の火に照らし出された二人の影の正体は、二十四五の大男と十四の小娘とであった。銀蔵は先ずおどろいて声をあげた。

「あれ、まあ、善吉どんにお竹つ子か」

男は佐兵衛の兄の善吉であった。娘はかのおこよの妹のお竹であった。自分の弟の松葉いぶしに逢ったのを小女郎狐の仕業と確信することの出来ない善吉は、その墓をあらず者をも併せて疑つて、果たしてそれが狐であるか無いかを確かめるために、かれは誰にも知らさずに昨夜もこの墓場に潜んでいると、夜の明けするまで何者も忍んで来る形跡はなかつた。きよの午ひるまえ前に、かれが村はずれの休み茶屋を通りかかると、茶屋の女房が客を相手に小女郎狐の噂をしていた。それがふと耳にはいったので、彼は店さきの榎のかげに隠れて立ち聴きをしていると、隣り村の平太郎の噂が耳にはいった。それに就いては少し思い当ることもあるので、かれは松葉いぶしの下手人の疑いを平太郎の上に置いた。そうして弟の仇を取るために、その方面にむかつて探索しようと決心していると、その宵には妹のお徳が何者にか傷つけられた。かさねがさねの禍わざわいに彼はいよいよ焦燥いりだつて、もう一度その実否しつびをたしかめるために、今夜もこの寺内に忍び込んで、長次郎より一と足さきに墓場にかくれて、自分の弟の墓のかげに夜のふけるのを待っていたのであった。

さすがは商売人だけに、長次郎は足音をぬすむに馴れているので、善吉もそれには気がつかなかつた。お竹の足音はすぐに判つたので、彼はその近寄るのを待ち受けて、とうとう彼女を取り押えた。しかしその曲者が十四の小娘であつたのは、彼に取つても意外の事実であつたらしく、善吉はいたずらに眼をみはつて、松明の下にうづくまつているお竹の姿を見つめていた。

「お前はここへなにしに来た」と、長次郎は先ずお竹に訊いた。

「姉の墓まいりに……」

「そんならなぜ垣をくぐつて来た」

「お寺の御門がもう閉まつて居りましたから」と、お竹は小声ながらはつきりと答えた。

「むむ、子供のくせになかなか利口だな」と、長次郎は笑つた。「よし、判つた。それじやあこつちへちよいと来い」

かれはお竹を弥五郎の墓の前に連れて行つて、一本の新らしい卒堵婆をぬいて見せた。銀蔵もあとから付いて来て松明をかざした。

「おい、お竹。お前の手を出してみろ」

「はこ」

何ごころなく差し出す彼女が右の手をぐつと引つ掴んで、長次郎は卒塔婆の上に押し付けた。

「さあ、悪いことは出来ねえぞ。この塔婆にうすく残っている泥のあとを見る。泥のついた手でこの塔婆をつかんで引き抜いたから、指のあとがちやんと付いている。どうも子供の手の痕らしいと思つたら、案の通りだ。てめえ、毎晩この墓場へ忍んで来て、塔婆を引っこ抜いたろう。花筒を搔つ散らしたろう。さあ、白状しろ。まだそればかりでねえ、てめえは庄屋の猪番小屋へ行つて何をした」

お竹はだまつて俯向いていた。

「さあ、素直に云え」と、長次郎は畳かけて云つた。「手前はなんの訳で墓あらしをしたんだ。いや、まだほかにも証拠がある。この五人の墓のまわりに小さい足跡が付いていることも昼間のうちにちやんと見て置いたんだぞ。いくら強情を張つても、墓あらしはもう手前と決まっているが、猪番小屋の方はどうだ。これも確かに手前だろう。さあ、神妙に申し立てろ。さもないと盲目のおふくろを代官所へ引き摺って行つて水牢へ叩き込むが、いいか」

お竹はわつと泣き出した。

「もう仕方がねえ。お前、おぼえのあることなら、親分さんの前で正直に云ってしまおう方がよからうぜ」と、銀蔵もそばからお竹に注意した。

長次郎はともかくも、善吉とお竹を庫裏の土間へ引つ立てて行つた。そうして、だんだん吟味すると、善吉が墓場に忍んでいた仔細は前にもいう通りの簡単なものであつたが、お竹がそこへ忍んで来たのには驚くべき事情がひそんでいた。庄屋の猪番小屋に松葉と青唐辛とを積み込んで、番人をあわせて五人の男をいぶし殺したのは彼女の仕業であつた。小女郎狐の正体はことし十四の少女であつた。

もう逃がれられないと覚悟したらしく、お竹は長次郎の前で何事も正直に申し立てた。かれは姉のかたきを取るために、男五人をむごたらしくいぶし殺したのであつた。姉が變死の報らせを受け取つて、かれは四里ほど離れている奉公先から暇を貰つて帰つてくると、めくら盲目の母はただ悲嘆に沈んでいるばかりで、くわしい事情もよく判らなかつたが、姉のおこよが縁組の破談から自殺を遂げたらしいことは、年のゆかない彼女にも想像された。そればかりでなく、かれは仏壇の奥から姉の書置を発見した。母は盲目でなんの気もつかなくなつたのであるが、お竹はすぐそれに眼をつけて、とりあえず開封してみると、それは姉から妹にあてたもので、おこよの死因は明白しるに記されてあつた。

おこよが隣り村へ縁付くことになったのを妬ねたんで、今まで自分たちの恋のかなわなかつた若い者どもが、隣り村へ行つて途方もないことを云い触らした。それは彼女が小女郎狐と親しくしているという噂で、かれはもう狐の胤たねを宿しているとまで吹聴した。罪の深いこの流言が正直な人達をまどわして、かれらが目論もくろんだ通りおこよの縁談は無残に破れてしまった。それを云い触らした発頭ほつとう人はかの七助をはじめとして、佐兵衛、次郎兵衛、六右衛門、弥五郎、甚太郎、権十の七人であつた。おこよは自分の縁談の破れたのを悲しむよりも、人間の身として畜生と交わりをしたという途方もない事実を云い触らされたのを非常に恥じて怨うらんだ。おとなしい彼女は世間にもう顔向けができないように思つて、その事実の有無うむを弁解するよりも、いつそ死んだ方が優ましである和一途に思いつめた。彼女はその書置に七人のかたきの名を記して、姉の恨みを必ず晴らしてくれと妹に頼んで死んだ。姉と違つて勝ち気に生まれたお竹は、その書置を読まされて身も顛ひるうばかりに憤つた。あられもない濡衣ぬれぎぬをきせて、たつた一人の姉を狂い死にさせた七人のかたきを唯そのまに置くまいと堅く決心したが、なにをいうにも相手はみな大の男である。ことし十四の小娘の腕ひとつで、容易にその復讐はおぼつかないので、しばらく忍んで時節を窺つていゝうちに、あたかもかの佐兵衛ら七人が十三夜の宵から猪番小屋にあつまったのを知つて、

かれは小屋の外にかくれて彼等の酔い倒れるのを待っていた。しかし自分の小腕で七人の男を刺し殺すことはむずかしいと思つたので、かれは俄かに松葉いぶしを思い立って、そこから松葉や青唐辛をあつめて来て、七人のかたきを狐か狸のようにいぶしてしまった。お竹はその足ですぐに代官所へ名乗つて出るつもりであつたが、母のことを思い出して又躊躇した。姉も自分もこの世を去つては、盲目の母を誰が養つてくれるであろう。それを見ると、かれは命が惜しくなつた。一日でも生きられるだけは生き延びるのが親孝行であると思ひ直して、かれは人に覺られないのを幸いに自分の家に逃げて歸つた。偶然に思ひついた松葉いぶしが勿怪もつけの仕合わせで、世間ではそれを狐の祟りと信じているらしいので、彼女はひそかに安心していたが、それでもまだなんだか不安にも思われるので、それが確かに狐の仕業であるということを裏書きするために、かれは更に高巖寺に忍んで行つて、五人の墓をたびたびあらした。しかし五人の遺族のうちで、佐兵衛の兄だけは狐の仕業であるか無いかを疑つていて、しかし五人の遺族のうちで、かれは飽くまで狐であることを信用させるために、暗い田圃のなかに待ち受けていて、善吉の妹をも傷つけた。相手の顔を掻きむしつたのも、狐の仕業と思わせる一つの手だてであつた。乱心の平太郎がこの事件になんの関係もないことは明白であつた。

「わたくしが生きて居りませんと、片輪の母を養うものがございませぬ。もう一つには仇のうちで五人は首尾よく仕留めましたが、二人は助かりました。その二人を仕留めませんでは、姉の位牌に申し訳がないと存じまして、今まで卑怯にかくれて居りました。それがためにいろいろ御手数をかけまして重々恐れ入りました」

お竹は悪びれずに申し立てた。

この捌きには、土地の役人共も頭を悩まして、例の「御伺」を江戸へ差し立てると、ひと月余りの後に「御差図書」が廻つて来た。江戸の奉行所の断案によると、かの七人の者どもは重罪である。あと方もなき風説を云い触らして、それがためにおこよという女を殺したのは憎むべき所業である。殊に人間が畜生の交わりをしたなどというのは、人倫を紊みだるの罪重々である。すでに死去したものは是非ないが、生き残った甚太郎と権十の二人には死罪を申し付くべしというのであった。

お竹は幼年の身として姉のかたきを討つたのは奇特きせきのことである。一切お咎めのない筈であるが、彼女はその罪跡を掩わんがために、墓場をあらしたのと、罪もないお徳の顔を掻きむしつたのと、この二つの科とがによって所払いを申し付ける。しかし盲目の母を引き連

れて流転るてんするのは難儀のことと察しられるから、村方一同はかれに代つて母の一生を扶持すべしとあつた。

これでこの一件も落着らくちやくした。人間の幸不幸は実にわからない。幸いにいぶし殺されるのを免かれた甚太郎と権十とは一旦入牢の上で、やがて死刑に行なわれた。

お竹は村を立ち退いて、水戸の城下へ再び奉公に出た。盲目の母は高巖寺に引き取られて村方から毎年何俵かの米を貰うことになった。その以来、この村では小女郎狐の噂も絶えてしまった。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：菅野朋子

1999年9月25日公開

2009年9月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

小女郎狐

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>